

「家族という名の心のつながり」

大石 和男

貝塚が市になった昭和十八年、私は大阪都島で生まれました。ここ貝塚に越して来て気がつけば二十五年が経っています。

空気が気に入ったこともあり、この地を私達夫婦の終の棲家と決めました。年金生活にも慣れた頃、二色の浜公園を散歩中に一人の老婦人と出逢いました。その方は幼くして両親を、四十歳になるまでに三人の兄弟も亡くし、それ以降は四十年余り一人暮らしだったとのことで、一人暮らしには慣れたと言っていました。私と知り合って以降、徐々に私の家族との交流が始まり、いつしか家族同様の付き合いとなりました。

富士山に登ったり、孫達とお好み焼きを作ったりした思い出は尽きません。孫が病の際には一緒に回復を祈ってくれました。季節が巡るたびに、今でも記憶が蘇ることがある。

その方は九十一歳で他界しましたが、最期に「良き家族と知り合えて幸せでした」と言ってくれました。この時、私は家族の存在意義を強く感じました。共に笑ったり喜んだり、時には悲しんだり、たとえ血縁関係がなくても、そんなふうに心を寄せ合える関係も「家族」のひとつの在り方だと思います。

今、私はご縁があつて老人クラブの会長を引き受けていますが、人生は一期一会、この町で出会った人、これから出会う人、そして一人暮らしの高齢者も誰もが互いに支え合える「家族」のようなコミュニティづくりが、私の余生の使命かと思っています。